

Chinese Artist

激変する都市との

〈対話〉に挑戦

北京の街を歩いていると、あちこちで、一筆書きの奇妙な男の横顔に出くわす。黒か赤のスプレーを吹きつけた輪郭だけの頭像は、ユーモラスだがどこか不気味さも湛え、不思議なインパクトがある。取り壊しつつある家の塀、崩れかかった柱、公衆トイレの壁や陸橋の下……場所によっては三つ、四つと並び、灰色の街並に妙にマッチしている。

この「頭像」の仕掛け人こそ張大力。彼が数年来力を入れているコンセプチュアート作品「対話」である。

「これは僕と都市との対話。人との対話。ここに新しい絵や字を書き加えてもいいし、せつせと消してくれてもいい。いづれにせよこの頭像が人々を刺激し、いろんな印象や感覚を生む。北京は日に日に現代化されていくが、この都市の文化構造は急速な経済発展に追いついていない。前衛美術に至っては、まともに扱う美術館や画廊もないし、これじゃ成熟した都市とは言えないさ。〈対話〉は

そんな人と都市との関係を表してもいる」。

張大力は黒竜江省ハルビン生れの三五歳。もともと水墨画を描いていたが、八九年にイタリアへ渡ったのがきっかけで、伝統絵画の世界に別れを告げ、自己存在、個人と社会との関わりや交流を重視するコンセプチュアートへの道を進み始める。北京でこの〈対話〉を始めたのは九五年の夏で、今までに描いた数はなんと三千を超えるという。

こうしたグラフィティアートは、ニューヨークやヨーロッパではもうお馴染みだが、北京では初お目見え。巷ではちんぴらグループのマークだとか、取り壊し家屋の表示とか、いろんな風説が飛び交った。公共の場所へのペイントだから、見つければ当然取締まれる。街の美観を損ねる不埒な行為、不道徳だとの批判も多いが、彼いわく、「僕が描くのはみんな廃墟や目立たない場所で、市民生活に悪影響は及ぼしてないよ。街に融合し、都市の変貌と共にいずれば消えていく、いわば都市の痕跡なんだ」。

最近、彼の〈対話〉は、(作者の名前は伏せたままだが)新聞や雑誌で盛んに取り上げら

れ、アートか否か? と侃侃罵詈の論議を呼んでいる。「やり始めて三年、やっと新聞やメディアが芸術の角度からこの作品を論じるようになった。大きな進歩だよ。中国のメディアは政府の意向を直接反映しているからね。賛成にしろ反対にしろ、公開の場で自由に討論できることが重要なんだ。そのうち名前も公開でき、美術館や画廊で発表できるようにになると信じてる」。

大力は、この観念のシンボルをモチーフにしたインスタレーションや電飾広告、陶器作品なども創作している。二月には、廃墟の壁に描いた頭像をくり抜くというパフォーマンスも試みた。数人の出稼ぎ労働者と一緒に、鑿やかんなどで壁をうがつこと一時間。頭型にぶち抜かれた穴の向こうに豪華な高層ビルがのぞく。そこには、まさに移ろいゆく北京の「今」があった。

中国転換期の 前衛アーティストたち ③

文●石川 郁(作家・北京在住)
Text by Ishikawa Iku

Zhang
Da li



張
大
力

写真上:98年2月21日に大力が行った対話続編パフォーマンス<拆>。廃墟の壁に描いた頭像を鑿やかんなどでち、くり抜いた。写真右:対話続編パフォーマンス<拆>廃墟にくり抜かれた頭像を透かして見える、対照的な現代高層ビル。

